

古河志

下、下

特 別

リ5

15773

6



15
15773
6



古河志卷之下 坤

○小野寺村佐野庄

一村上組中組下組と分て為三村小を以て上と次

藤浪氏藏

一古城跡 下組耕地字場と内といふ所也今字場

跡とおなりき所ありて城墟を悉く燬せり

一山形寺志曰山形寺ありて郡為系通鑑を藤足内

大臣の存胤ありて古能の部古史資氏三代山形部左馬

通業ありて古能刑部俊通藤田多富字房は通鑑の

伯父と云ふは後醍醐天皇の長男なりて而して古史資氏

多富親王九年合戦の時拉致公成父子は上上下下七

騎の勇士也ありて古能通鑑廿八歳の時治承四年

古能宮内謀叛の別田系又古能右衛門と一なり字後

亦云々通鑑
古史資氏
子ハ通鑑
鑑と云々

河の先陣を領し言名をといふと元来原氏禰代に
出良が頼頼の所より功あり故久治の次小野も
十今子川邊を居て頼り小野も子任を野々守智
羽上皇御謀殺初先例に任せ禰倉殿より先陣をぬ
りぬ孝久三年六月十四日宇治川の中より一
軍の時戦死を法名任村右院殿弘國通鑑大衆と
と号す依てとも山田右の子孫依て家と一門あり
といふとも乱世に軍陣して不快也永西の次同國川
邊へ川城り故小野も家の末系家系所とも南村
み跡に小野も家のより悉く東鑑に家物語生靈記
禰倉志と異別軍記ありと要知んてあり
以上二卷より
禰倉志あり

くきありたるもやあつたをのをたり東鑑
よりとありたるもと已むぐりたるものなり

一 東鑑に建久六年二月十日將軍家末方右佐義の時
南朝より石見より入道とありて末子小野も中務丞
道鑑とあり孝久三年三月十四日宇治河戦の所子
小野も左衛門入道とありて末子小野も中務丞
とあり 建長三年四月十六日將軍家末方右佐義
人の内小野も新左衛門尉通和布とあり同年二月廿
日將軍家末方通とありてお家の所より一とあり佐義の
うち小野も中務丞尉とあり同年十二月廿七
日將軍家末方通とありてお家の所より一とあり佐義の
左衛門尉通和とありてお家の所より一とあり佐義の

とも裁りか多し遠く東隣等よりあきらかに
町委をさへし

一古城隘といふものより小野寺より大阿久氏とあり大
阿久の佐野家臣の中ねを古川崎へ退きし
後をいふものなり

一墓石 三井三十八人城堀の耕地の西門内程
の墓上よりなり

石面 小野寺前司太郎通綱之墓

一八幡社一字 上組も他 此社の方より後へ二本目の柱下
の方へ木の如く埋めたるいさゝか彫
物なり木より左甚なり作と
云傳ふ

祭神 岩田別命松殿 山王権現

神主

宮本数多

一蘇芳樹一株神樂殿のあきなり

一より多子掲たる額面

紺青

延喜 八幡宮
式内

新田大炊介源義重三代末裔源徳純謹書

〇印章

岩松海部殿前也

當國式内

一立石 一二多子掲たる
各建

村檜神社
十一座

一少姓志曰文治の頃小野寺大寺あり同太郎後通綱

象力を施す此種を送る後史と有り功徳の結縁を成せ
人といひ終りく忽ちとも常々物喰ひ信憑の家一も
難儀をふ見成や神力ヲ飛かぬく異来子あり安を
初め意感一なり大急事重なるのうろ一は海方大船
を助後一なり一は世の時の荒なるを近き以再興
を助成る

下谷系 赤嶽山

山崎山 大急事

一
人皇甲子代聖武天皇乙未年丁丑に基僧正は勅
定より日本六千餘州より十八ヶ所の國分寺を建立し
その中なる一は山崎山に於て基菩薩の西作基師如來也

山崎山ハ下野の國分寺なり本三ヶ寺也今ハ山崎と成
て山崎山と云ふと改む又山崎山と云ふ村名も成住
古より山崎山と云ふ村名を有て十ヶ寺なり三ヶ寺
下谷系江新里駒場ハは系録案山崎山也三ヶ寺といふハ
江原三井寺奥山山崎山と云ふなり
下野國分寺ハ壬生の南山山崎山ハ西山と云ふ
なり其も後國分寺の古瓦を田畑の畔より掘り出
るなり其も一ヶ國に一ヶ寺なる物を

一
山崎菩薩の二座禪石といふあり古ハ淺摩修行の跡と
云ふに云ふといふ大嶽山也云々山崎石多あり

面ニ 開基行基菩薩

右側 道忠菩薩 廣智菩薩 安慧老徳

背 中興慈覺大師

左照

享保二十一年丙辰二月十四日
現住堅者法印智湛修造之

一黒岩山々大慈寺の地より慈覺大師秘苑の遺蹟より
て人家を離れ人聲を絶し孤松の嵐煙の姿を覺る溪
水の流る濁の垢を洗ふ南ハ伊豆浦を尾尾北ハ黒髪
山をなうむ富士氣波たあすしてまじりて多岐の絶景なり
言祖大師の法在世もかくやと千年の昔を思ひやう塔人
をを感んせと云といふと好くさて又山のふもと大師の
座禪石あり護摩修りの席也不動石金剛石薩埵
石硯石あり紫雲護摩の跡も灰炭あり不淨の老付
所ハ石出と云ふなり

七堂伽藍を建てるにあたり三万六千坪ありて園池を
双の壺橋よりして亂世の音度々大伽藍を滅亡
して今護摩寺瓦礫の跡に國の古の跡あり而も
亂世に焼失して今ハ寺ハ不代忠嚴法師の法印
師身位藏の別本寺あり大形再興あり其外秘迦文殊
普賢不動慈覺大師の像は自作の如仙茶師といふれも
慈覺大師の所作也日光月光十二神涅槃像繪大盤
よりなるを寺にも納りてハ寺にも少くなく

一相輪權

人皇五十六代桓武天皇延暦五年甲子僧教大師

比叡山草創の存弘仁六年乙未勅定して護國寺
のたよりあり十餘畝の地を六ヶ所相輪權を建てる

并一比叡山东面の坂本豊前守依能前國親世者寺
上野五鬼不彦陸國常侍寺下野五山卿寺大為寺也
依能の所傳教大師下向ありて法華一子歌其外諸大
乘經廿一部等を奉納の由を録傳記に記えたり
大為寺を編撰ハ乱世の別則破失しけるを享保十年
乙巳旦重修りし僧尼名沙弥再興しける寺を大入
早り人西面數目々しけるも日光寺の所公寛法
親王の所奉也古録ハ傳教大師の此化を記す新記其
寛永寺寛親大僧師の作也寺の勅作しける道俗書等し
を細くしるも日光寺の所傳撰と叡山东面の坂本を傳
せり所傳傳教大師の古録しける新記大為寺を編撰しける

セーものり印

比叡山相輪檀銘 沙門最澄撰

葦芽開廓	天主下生	短歌長歌	未防魔兵
才三十主	初開梵覺	泥像燒舍	法鼓未鳴
聰耳立憲	乃信三明	使歸南岳	請經野鄉
因果冷然	開悟群盲	時機未熟	洮汰五驚
天皇出家	咸得天平	受菩薩戒	四車喪
海内諸州	制底縱橫	雖敷法筵	未遣五莖
豈若先帝	憑天台評	新立圓宗	永填火坑
年々兩度	紹隆妙行	為悅冥道	起斯輪檀

敝嶺秀聳	朝影北都	神岳嵯峨	夕臨東湖
山王一等	思存給孤	法窟為号	開顯毘盧
亦塔亦幢	延壽安身	惟經惟咒	護國濟人
金利放光	汲引迷津	室澤流聲	爰開龍神
我等發願	渴仰文殊	十生出現	普施髻珠
信謗兩友	俱會四衢	同乘宝車	恒遊寂區
長講妙法	恒轉妙輪	五忍恒說	永息魔瞋
世界未盡	此願不泯	成住壞空	不散此塵

弘仁十三年歲次庚子九月中旬

新銘 野之下州佐野莊大慈寺重建塔記

弘仁六年告 傳教大師欲建塔六處各藏妙經
 千部及諸大衆經以為國鎮矣先錫杖於野之
 上下州鬼石鄉綠野寺及此佐野莊大慈寺二塔
 成焉併廢尚矣至寬文十二年綠野寺塔雖復大
 慈寺塔如故近有僧常心者深歎徧募致四寒暑
 而命鳧氏以青銅鑄成高一丈八尺入地五尺八
 寸其末稍殺而徑之欲中藏師自寫妙經百部欲
 人寫九百二部及餘經廿部鎖以祖銘不設新制
 余感斯盛舉經記款末云爾

享保六年次乙巳九月中旬

寬永寺 大僧正實觀謹書

小野寺山大慈寺住法印智周繁譚

一行基菩薩傳 高泉高僧傳曰秋行基姓高志氏泉
州人利利之種也生時胞衣纏身其母以為不祥懸
於樹下經宿出胎能言父母悅收而乳之童稚與群
兒遊輒讚說佛乘邨里牧豎捨牛馬而從者數百人
及其歸也牛馬四散基登高一呼皆應聲而至率以
為常志學之歲脫白居茅師寺學瑜伽唯識等論於
新羅慧基公依淵法師益智證又稟具戒于德先法
師名翼四振凡所過處耕者息耒織者投杼追隨參

礼無餘地或逢嶮隘輒橋脩道指某地可耕種某水
可灌溉或穿溝渠或築堤塘皆揮霍即成國人至今
賴之五畿之內所立招提四十九所嘗遊化故里里
人捕魚宴於池畔少年者戲以魚與焉基喫已須臾
臨池吐出皆成小魚游泳而去見者驚歎一日犯仙
度沙彌禁于獄中而遊里閹獄吏以聞詔赦之聖武
帝特加敬重擢為大僧正時有智先法師多才智嘗
流諸經頗自負聞基聖眷不滿其意懷恨隱於山
谷俄暴死十日而蘇啓諸徒曰有真便驅我行路次
見一金殿高廣光曜我問何處曰汝自負知者奈何

不知此行基僧正受生處也前行見焰火漲空惡境
可畏詢之曰即汝當墮之處既而到王所王呵曰汝
在閻浮提不自檢察妄嫉大僧今召汝治其罪非命
終也即今抱大銅柱骨肉糜爛而後放還光詣已詣
基懺罪時基在揚州造橋見光微笑光伏地發露禮
謝天平廿一年正月帝詔授菩薩大戒及兩宮天眷
皆預戒法特賜行基大菩薩之號二月二日於管原
寺東南院右廡而終春秋八十有二焉許我志
一震且揚州鑑真和尚天平徬窺六年才終道忠菩薩
和尚之上足之矣東之大導師也唐智菩薩道忠

自念曰我必得妙法而權衡此道按濟含生也未幾
蒙官給牒聽徧遊非神祐也邪往青州見節度副使
判官館龍興寺判官尉問勤至翌日延至家供養判
官蕭姓諱慶中明佛心宗仁与道誥蒙印可將遊五
臺於普通院遇志遠法師受摩訶止觀又於真善寺
面元政阿闍梨学金剛界大法受五瓶灌頂次年詣
青龍寺入胎藏灌頂場學毘盧遮那經中真言印契
微儀軌及蘇悉大法因胎藏大曼陀羅夢人來曰五
臺和尚問訊大德々々因曼陀羅我深歡喜乃以劔
授之曰此是北臺和尚所贈覺後知是文殊應感大

喜寓長安六年嘗遇諸碩德各有所授會昌五年屬
武宗廢教緇門無托仁方憂悶夢傳教大師曰我當
護汝不必懼俄軍牒下聽歸國尋到登州又夢達摩
宝志南岳天台曹溪諸師并本國聖德太子行基菩
薩傳教大師俱來護送是年春有商船赴日本遭逆
風著登州界聞仁欲歸舩每以待蓋衆聖之靈也九
月登岸寓太宰府乃永和丁卯十四年仁以所傳經
書法具隨表進闕帝種々慰勞明年應詔入洛本山
僧衆求聞灌頂法乃聞尚書蒙允許給千僧之供兼
護衛法事又以五臺山念佛三昧法授諸徒修常行

いふ

一山依止法院といふあり此若任其寬政中お根づゝんせ
し時棟木は第入るゝて弦付あるをひらきこゝれい三通
の書あり依るゝおやけよきお之あけぬひゝゝいゝあき
とあきとせぬひもいゝと

去病苦ゝゝ帝難友醫洲難治ゝ要は坊授お
一各抽祈精丹疎固急快全知帝多比類
照力依感為其貴者坊於任ふゝ疎居村為
古飲乞食附名も元康為武門棟梁時帝て
や出しふゝゝお書し於る理を要る坊平衆七人
事つゝあきと也

弘治二辰年三月

駿府の北門外藤原氏屋敷内

竹千代

元康氏判

江田松本坊法下

為元後之悦也あり并

干綱ニ新送臨るる

玉々あり上

辰下より 國崎三郎

元康氏

江田松本坊法下

かどの僧號よりいづくか村の名をあらわたりと巨碑

より知られ世あり里供も忘るるなりいつの頃かを正

より知られあるより年月を忘るるなりといふあり物門記

昔物語等より下野より戦のありて元康氏にあらわ

時の伝承もあるといふと古社の縁起の大方の

伝承より伝説の中よりたゞちとるなりあれは

やうなり

○大田和村

大田和山と村の西邊より背のそくお新那と和

よりいこりお山といつては故を三西よりなり

さぬお山と山と山といふなりたゞみあり

有社を云ふ一ツハ杵現杵現一社と云ふやうに杵現也
お永四事て未の事何者のひ出多るや此山此山子綱の
あるより一ツハ杵現杵現一社と云ふやうに杵現也
はしやと云ふよりと云ふ杵現の跡はるるやハ人程を
深サ廿リあり極へし極なるも也といふ

一許我志曰三毛カモ山ハ大田和村ニ在テ土民大田和山ト云
ノ萬葉集卷十四 之母都家野美可毛乃夜麻能
許奈良能須麻具波思兒呂波多賀家可母多牟

一名所部類和歌集

蓮采

蓮采は蓮の葉を
採つて法体の
なり

下野やあそふ河原子行ふいこくもの海子宿を
くらもちん

古色蓋益迎待兒女子之觀乃尔相傳有奇巖象舟
出山上虚臨千尋溪亦因名焉欲觀之振炬搜索山
中殆遍或途所窮非無蕉原之悚終不能得焉乃舍
而去大抵山中皆峻巖所渭石山戴土者也闇夜以
炬探奇極矣入寺前店舍而休乃開行厨共飲相愛
從僕疲者或疑吾輩過神佛之祠多不敬今乃冒夜
涉險雨亦困矣神誠有知忽与此苦罰爾不知世之
探勝者多矣即有慙如斯者邪是且为我歎一奇吾
輩狂愚無所不為恐操蛇之神懼其不已乃笑而後
取道西面石磴數盤所踏雖夷稍愧俗跡即下直向

一 比山頂水のたよりありしを以て年月を經たり
し久治のころ山上を鑿て掘えて法例なる水を掘
り今墨の茶を井なりといふ

本山弘修院
同公只本村
盛光院解下

正門院

不動坐
一字

元來物つ院と書布りしを故に此所ある一平将門上下
此所の会戦のと記軍書とて一番此地也とすいかの處

米少許與於旅舍主令炊爨舍主報道些兒米滿鍋中甚奇希有也翌日之晚炊亦復如此不擇鍋釜大小一手裏米盈溢皆然也見聞遠近無不歎異也竟還伯州旧房招請滿山徧素而平等施濟各飽箱米之飯鼓腹退矣人歎未曾有或乞米或飯為乾糲持者往有之也沙門又引接信心修善同侶數輩再往詣岩船則山石草木如舊而無菴室下僧亦不見問許鄉人々々相謂久住當村未知有此異事云若有信心者即見諸佛身豈可疑乎余來相繼佛閣僧房宝塔鐘樓漸々管之經之庶民如子來戮力遂

成大伽藍號岩舩山高勝寺也

一南郭股元喬與稻仲明書牘畧曰畧歷涉山田大中寺復斜南至巖舟山下路當自東面險上時已昏黑小雨未歇令前行者多裹大炬進鑿巖為徑照視拾鑿痕而陟前者呻後者呼峻不可言卻行仄行連行纤行有躓者有跳者有匍匐者有超來者映火視之熊經虎跑與人盡為異物狀余亦下輜拄節蹒跚而上幸不甚高盡數百步劣得到頂不覺相視哄然大笑山鳴谷震此時也山鬼亦應疑畏賊入有寺安地藏堂宇門廡莊嚴甚新頃未所信詣未繆紛絢絕無

期也沙門不勝感喜默禱而已晡之後人來敲門呼曰地藏房在予明日可耕田未把牛鼻繩否又人來曰地藏在乎明日可葺屋未可誅茅根否又人來曰明日可造家未可葺否下僧一々許諾沙門先聽呼地藏坊之名偏生恭敬心因自思惟同日可并餘多也所作不思淺也黎明以種々飲食乞与沙門曰一日在世而不順人情者家資難給即出去矣其後沙門飲食訖回視山麓之民里農村有把鼻繩所有誅茅根所有葺屋所一人三所分身三所一體也默歎而歸于草庵矣日又迨暮色寒鴉歸林遠鐘聲罷後

下僧還未疲困而卧矣晨朝起倡沙門仰錄行徑既
峻巖攀薜蘿登漸到山上向此峯可佇立菩薩出現
所道下僧立絕巔之奇絕吾躬自須到脚跟一齊
左右相分一分便等身地藏大士難見難思妙體光
耀朗徹譬如明鏡寫万像三界六通色相無陰覆分
明顯現是妙經所謂一切諸群萌天人阿修羅地獄
鬼畜生如是諸色像皆於身中現者予合掌瞻礼須
臾之頃分身与本身同合而共復一形則下僧也相
共飯干麓之菴懇志慰喻以白米一箱施賜曰可為
歸路之糧矣沙門且悚慄且歡懽赴旧山其暮以箱

魔不_レ可_レ得_レ云

此魔不_レ可_レ得_レ云
云又終子_レ山_レを_レま_レる_レ云_レ人_レの_レて_レ物_レと_レ化_レす_レ云_レ山_レ子_レ使_レり

下埜州岩船山縁起

夫當山開闢者人皇四十九代先仁天皇御宇宝龜
年中伯耆州大山有鍊行修善沙門欲見地藏菩薩
正體而提念不急所求大山權現年尚矣一夕夢
衣縑縷老人告曰地藏無於此山自是東方下野州
有從金輪際出生之山号岩船正身地藏在于彼山
話了不知所去夢忽醒矣沙門歡喜踊躍便負竹笈

着草鞋癸足行程漸到東楚州而尋覓彼靈名之山
其鄉人指曰東北之層巒是也於是卸笠拭目仰望
則怪巖高聳老松蘚茂而雲霧覆峯實塵外無双之
勝境也唐人詩所謂白雲似帽覆山頂青苔如衣懸
岩肩者予彌信夢想通氣展懽喜之眉凝渴仰之膽
近到山之趾見有小草菴束松柴為牆編柴荆為屋
草門半傾庭草就荒幽邃寂莫也日既向迫晚懇請
投宿主者老齡之下僧也排柴戶而延沙門於菴內
進茶設饗後問往來所由審詳說多年夙志再夢之
感下僧曰斯山上時有靈應明之又日必影現之

今度方知台殿之別
元康旅陳氏村五款
收者者者者者者者者
某初陣之右勳者者者
戰初末於海浦竟也神妙感
為平實沙門之小方者
願者也

松平人

久保元平

元康旅

松平坊說才法平

○駒村 本名駒村と云或曰
因名在駒場を以て 佐理店

一 岩形山地を以て 一字

ふ南

て名宗 市蔵の末

岩形山蓮花院

三 瑞鳥

此山東南より上る山方勢多岩形山田大平山と云ふ山に
うちけりけり南より西へうけけり村の村に新野と云ふ
寺あり寺堂ありと云ふ一寺の彼處なるものなり
寺の男女群集を以て

一 烏丸大納言光廣卿御臨座紀行の月三月廿九日のと
ありと云ふ岩形山地を以て

ムレ氏金少償フアタハズ因テ贈ラル、ニ其
家ニ傳フル所ノ猿樂ノ舞衣舞具ノ善美ヲ尽セ
ル數十品ヲ以テス後ニ以家轉軒シテ多ク財宝
ヲ鬻キシ時舞衣一領ヲ二百金ニウレリ又古作
ノ鬼ノ面ヲ阿部侯ヨリ五十金ニ求レトモ價卑
ヲ以テ与ヘズ是皆本多侯ノ贈也ト云今ニ
大君日光ノ陵へ参リ玉フ時ハ彼レ大官格ニテ
鎧ヲモタセ必ズ尽ク黄金彫飭ノ二劍ヲ佩テ出
リ此所ニ六部堂建シハ故アルナリ又予嘗
テ聞ク累代餘ヲ積テ然ルニ非ス元禄ノ頃未タ

貧民タリシ時或日黄昏ニ及テ六十六部来テ一
夜ノ宿ヲカレリ明日去ルヘキニ病テ数日逗留
シ遂ニ瞑目セリ因テ其笈ノ内ヲ改メ見ルニ金
五十兩アリモトヨリ何レノ所ノ人トシラサレ
ハ即チ厚葬シ餘金ヲ尽ク已カ物トシ是ヲ種ト
シテ次才ニ貸殖セリトイフ後彼カ追福ニ六部
堂ヲ建テ廻国ノ修行者ヲ宿セシムトイフ今尚
存セル是也ト又近頃其邑ノ者ニ問シニ一奇話
ニシテ前説ト同シカラス渠レ世々郷士ニシテ
富ヲナスヲ久シ元録ノ頃初テ然ルニ非ス叔其

六部堂ヲ建シハ大ニ故アルヲナリ此家ニテ新
之亟或時且那寺感應寺住僧ト事ノ辛ヒ起テ私
ニ決スルヲ得ス江户ニ訟ニ及ヒシカハ各ヘ
召簡来リシニ主僧ノ前ニテ新之亟偽テ怒レル
マ子シテ其召簡ヲ裂テ是ヲ火ニセリ是全ク預
シメ贋作シ置テ焼キシト也主僧カクトモ知ラ
ス驚キ又訴フルニ渠レカ上ヲ憚ラサル無頼ノ
状ヲ以テセリ即チ覆治セラル、ニ新之亟真ノ
召簡ヲ出シテ然ラサル事ヲ白セリ此ニ於テ元
来ノ事ノ是非ヲ差置テ主僧ヲ先ツ偽ヲ訟フル

ニ帰シテ追放ノ罪ニ行ハル僧其故計ニ墜テ冤
ヲ蒙レルヲ深ク憤レリト云後哉ハクモ無シテ
癩ヲ病メリ自ラ悔悟スルニ是不善ヲ行ヒテ報
ヒナリト仍テ六十六部ニ成テ廻国ノ修行ヲ十
レ適佐渡ニ渡リ梵字水アル寺ニ至リシカハ寺
主ハ即チ感應寺ヲ放レタル僧ナレハ大ニ面目
ヲ失ヒ愧耻シ即チ梵字水ニ入テ死セリ其後此
水穢レタルカ爲ニ梵字浮ムトナシトイフ是ヨ
リ後廻国佐渡ヲ過テ此事ヲ聞者関東ニ至レハ
必富吉村ヲ訪テ是ヲ吊セリ此ニ於テ六部堂ヲ

建テ来者ニハ必ス小金一箇ヲ与フ此皆追福ノ
爲也ト云ヘリ

此處説を以て之證ニ免る者二三人ト云ひ試
シテ皆いふニ此家全盛ナル人々のその如ク
より出て行くの難儀其ありと云けり其事
多ク一々いふ所のありき人々廢疾者や出
ていかにありしに及んで人々を忘れたる
より其のききとなくして六部堂なりてある
事出たりなり其證を以て之を證とす
今日の寺をめぐりて六部堂をたて

修其志——といひおきて出あられをそのたわ
建立せし事也と軍供ひし傳へ——とあるふ文化の
以てありて候子に形を毀廢しそを——可く
志する者多し——と上

一南郭文集与稻仲明書畧曰再舩野渡行至一小驛
曰邊屋吾輩七子如出襄城之野遇亭長問途則曰
畱吉距此十里而近日暮乃餽夫馬亭長畱吉主人
所識預知吾徒當過奔走速辨而後不為迷慮徐向
畱吉至則鄉口森然列柏從橫巷道町々为大邑居
蓋園村皆石塚氏所占住故不似他之野里槿槿既

而主人拳族整服逢迎招待甚恭自門祖堂巨燭照
天乃延上堂厦屋連楹供帳施設拜趨進退遇以大
賓而吾輩疎慢为性乃顧諸子未遑解裝欠伸旋露
頗似厭繁礼者時頃供饌飲食訖始乃寢息明日雨
日晏而起追憶前二日天晴氣暖不為行徂相言为
慶至夜蒞樹蕭飒宜聽秋雨命酒賦詩翌日亦到更
夜雨晴步涉主人園怪石嘉樹鞠場茶室率倣都下
貴遊家加以素封之居千章之材園後有主母之居
而謁延至樓上為設茶酒歡語而還休止三日或乃
散行近莊時方收穫農夫婦子皆出在野田家之趣

与秋晚之景相适亦足以滌平日囂塵之胸主人為
吾輩迎歡勉欲日新至千會人作舞曲惟樂都已未
未嘗遇山即望西北有近山如一盆石望翠可掬不
接他高處蓋孤山爾問之則云太平山道即往返一
日行云吾輩勝癖復幾乃將適遊時十月朔日也夙
駕而出諸子与主人家輩謹謀俱行群連炬相呼而
歸都人士所不能習畧到館既三更亦復飲而歇間
二日以初四之日將發歸乃因舟就下流出至部屋
斯干諸流所會漕船多湊富吉主人預命船主儀一
漕船船主巧意以囊米疊床積炭苞壁左右以帷衣

之覆苦為屋中間為居所餘囊苞重疊艫上為觀樓
儼然一大樓船也皆俱上舟主人家相送至古河而
別畧下

同諸子遊下毛州富吉石冢氏家行樂數日賦贈
主人國鄉三首原五首

近縣浮遊真偶未留此鄉主人多雅性吾輩任清狂
万頃臨波濶千章列樹長所求出意足都會杳相忘
仲長論樂志平子賦歸田園菓香柑熟河魚玉鱠鮮
飲未三日醉談罷五更眠家釀千餘石坐疑封酒泉
豐稔田家樂淳夙別有情隣蒞秋穫後巷曲夜春聲

日出犬雞散。天開草木清。只慚武陵客。行使野翁驚。

秋夜宿石塚氏館聽雨得四支

村樹秋聲兩繞枝。終宵置酒欲酣時。相看不是離家遠。猶似蕭々添客思。

石冢主母氏詠歌跋

余遊富吉石冢氏家。見主母氏觀其所詠國風玉質金聲成章盈簡。余乃不覺歎容起敬。曰。魯古先王迺文。國風惟盛。朝廷閭巷以矢其言。無非九功之歌。宮媛閨娥相與爲詠。亦被二南之化。是傳誦彤管之辭。有闢婦言之婉。而中世^政殊其俗亦變矣。作者猶爾。

不^レ乏女流茂焉。莫聞所謂先王之教者。茲睹主母之什焉。若有采風。庶亦求野欤。且夫好古者必尚其世。尚世者必行其則。然則石冢氏母推之。內則亦猶父伯之家教。以古訓也。家範攸立。母德可敬。請余有言愧道。未習敢題。所聞姑應其索。乃爾。

此時後子遷夢を隔く唐詩選中の七言辭句を
中書より出さるるを此標として家の名を又墨画
の字を以て標して之を其記す云

凡書画有^レ不^レ論巧拙。以^レ其人取之者。則或名德或熟貴。唯其所獲。乃尊奉以藏之。而名家不與也。此因也。

是為南郭先生所為也其以為巧乎余豈敢知之其
以為拙乎余敢知之唯是高遠慘澹氣象自別不知
少陵所謂寒空煙雪者如何乎其品蓋有雖名家猶
不可及者云先生以天下文宗名德於一代也固當
不論巧拙尊奉以藏之矣况其品又有雖名家不可
及者也乎其人豈可與尋常所獲而藏之者同之也
餘秉裕謹識

一藥師堂 一字

別當兼帶

安養寺

瑠璃岡

北御堂 縁起 畧

粵ニ扶桑東邦野州都賀ノ郡富吉邑茶正山茶師
如來ノ濫觴ハ其昔三國傳來ノ尊像ニシテ毘首
羯摩ノ彫刻也然ニ 人皇四十五代 聖武天皇
ノ御宇天平年中行基菩薩諸國經歷ノ時假ニ此
地ニ錫ヲ留メ給フ或時忽然異人來テ告テ曰我
ハ是レ此土有縁ノ教主醫王善逝也三國傳來レテ
此地ニ影向ヲ止ムト雖モ其機ニアタル者ナシ
汝ヲ待リ久シ畧願クハ汝我ヲ此土ニ安置シ
衆生ノ群類ヲ濟度スヘシ我此名號一經於耳衆
病悉除心身安樂ト告畢テ畧光明ヲ放ク忽然ト

シテ見エ給ハズ大士未曾有ノ想ヲナシアタリ
ヲ見給ヘハ金色ノ葦三本アリ其根ニ尊像ハ瑠
璃金色ニシテ御座セリ依之瑠璃歡喜礼拜シテ
衣ニ包ミ抱ヘ奉リ供恭拜頂シ則チ其瑞跡ニ一
竿ヲ草創シ自ラ服ノ大士ヲ彫刻シ同ク安置シ
奉ルトカヤ此地ヲ富富葦ト云畧人皇八十九代龜
山院之御時造宮悉ク成リ莊園數多御寄附アリ
宝殿ハ云々兩扉昇龍降龍アリ希代ノ重宝奇瑞
影シ畧天正十二年十一月十八日北畠ニ御堂并
ニ御朱印靈宝等悉ク焼亡ス其中宝殿ハ玲々ト

シテ有シヲ堂傍ニ常住ノ行者火中ニ入テ易々
ト負ヒ奉リ隣村中根ニ至リ假リニ草堂ヲ結ヒ
暫ク安置シ奉ル其旧跡今現然タリ夫ヨリ自ラ
建立ノ地ト成永代ノ秘仏タリト雖モ十方ノ助
力ヲ乞ヒ卅三年ニアタル歲ハ怠慢ナク崩扉セ
シムル也畧加之石冢某カ富テ是ヲ修補シ殊ニ
山門一字ヲ建立シ修補ノ連綿怠ナシ畧

古河志附録

○下野國安蘇郡佐野庄植野村

一安蘇郡

後名鈔に出づる所集十に在りし志母郡家努
安蘇乃河伯良云々外に永永元元あり

一世俗に世ありを在て佐野といふをれどより已き

てさる地名を在 中古唐氏山に在城と佐野氏

の領に在る村を在かくいなり 後名鈔に在る所

一平尾氏云植野村を古河領よりして無比村の古村と

一村を四區より在る本々大山唐塚伊保内と在村と

四家あり古河よりありて昭野の南よりありあり南

へる沢といふ川あり運送の便より平原の地あり

殊に豊饒の地也と

一 東照宮

一字

此宮社の境内より流産邪にハ
流す社家より兼多き

神事 四月十七日

東照大権現縁起

下野國安蘇郡佐野莊植野村於赤城大明神之境
地 東照大権現鎮座之始、元和三年二月從駿
河國久野山遷坐于當國日光山之時、因官路暫時
止於 室麁當村路傍小原、後其止地、為塚之四
境、田畑也、里民耕耘之者、或坐、稟崇焉、真怖 神威
之顯然、奉寄田地四反四畝九步、然猶不堪尊崇之
意、塚邊之地盡、後赤城封疆、新建神祠奉祭

神君之尊靈、噫、万世不易國家鎮護之鴻德、可仰可
敬者也

右縁起者、延宝二年甲寅二月、家祖政信所録也
然、未脱稿而終焉、故予繼其志、淨写之、奉請蒙神
祇管領長上之高覽、賜印證云爾

下野國安蘇郡佐野莊植野村

正一位赤城大明神神主

寛政七乙卯二月

早乙女主膳藤原尚信敬識

右一覽之序、加姓名印章畢

寛政七年六月十八日

神道管領長上卜部朝臣良俱 朱印

一正一位赤城大明神社 一字 粉彩頭佳麗也

祭神日本武尊

神主

早乙女縫殿

神事 三月十五日
九月廿日

傳記云尚社往古ハ白幡明神と稱し、田系為友
秀郷上毛利根山といひ、而も城あり、いふ時武門
の守護神とし、上毛の一宮なるゆへ、城内の陸産

と、今祀り、並、城尚、而、唐澤山、子城をうつ、され、
や、平山の田ハ牧澤といひ、而も陸産をよ、いふ、
上野里 中古越の 白幡の社を日本武尊を祀り、赤城
の社といふ、神を祀り、いふ、社号あり、いふ、祭神同
一、け、れ、赤城の社号を表し、て、孝七年十一月
廿、唐澤山より、す、而、遷す、いふ、と、いふ、社、
永三十七、其、内、其、を、蒲倉、氏、代、治、承、いふ、と、いふ、
平、其、改、ら、る、

一神水 岩井と云

下毛、今、傳記、ハ、極、理、里、子、赤城、の、大、臣、神、と、いふ、
万、一、て、其、の、一、里、を、う、いふ、と、いふ、給、いふ、いふ、

到武之淺草地_{終止宿也}次到木下川里土人_{奉而}
止之則修茅屋暫安置之_{厥靈驗感應居多也}首輦
瘠_{咄隨願愈矣}爾時廣智有事西_{復歸}敝_嶽後來大
師神足之圓仁慈覺大師欲_{下向東}關到_着木下川
里拜請茶師如來靈像_{駕載於大車}欲_到下毛州小
野寺路過龜峯前車輾而不_{運使}力者_{強推}轂之_蹶
然車軸折也將_{謂此有因緣}予便_{開辟}荆榛卜_{境地}
八町創造大伽藍奉安置供養如來也則利生接_物
亦的然如_{初也}次正應年中有故改_歸禪苑維時鐘
堂和尚修造之引以_月洲兼禪師為_{崩山}之祖如來

感應亦如同昔然歷星霜又到天正年中小田原之
軍出_{館林}之日罹_{兵火}伽藍殿閣皆_悉灰燼矣雖然
厥靈像嚴存也其後盤結草庵以奉入其內日久矣
靈感依旧猶不改_{沈疴}橫難急病普應_{所願}免_瘥也
居在_干此_{視之}拜之慷慨奮然故_{勵精進勇猛}之力
募_{四方之緣}修治之此時加_旃太守土井大炊頭源
利重公依補助之_{揀度}經營之功不自_而堂宇皆與
矢成矣使{遷坐}供養尊像則方應如_響隨_聲蒙_{利益}
無量也仰冀有_{接予}微志之武者十二願輪一時轉
則當願_人生_{攝取}不捨也越_不願_{孤陋寡聞}而粗記

之以俟後來住任之大願士於是乎自利利他無盡
維時元祿才五明集壬申新夏初八日

下毛州安蘇郡佐野莊植野村龜峯山東光寺現
住琢玉堂謹記焉

一鐘樓 鐘銘

下野國安蘇郡佐野莊植野鄉龜峯山東光禪寺者
無準和尚法孫月洲和尚草創之無參和尚中興之
所其經堂七宇十二菴也聞昔撰華樓懸華鐘曾為
凶賊所埋之遂不知其處方今諸檀越以嗣旧因命
銅工鑄焉於是新鐘成矣故為銘下

寛文五乙巳載四月朔日

龜峰十世傳法沙門

玉堂祖琢謹誌

一蘇東坡硯一枚什物

許我志云東光寺二古硯アリ相傳テ東坡ノ硯ト
イヘリ因ニ写シタルヲ見ニイカサニ其製作
奇雅ニノ中華ノ物タルヲ疑ヒナト見ユレ尼
東坡ノ文房タルヲ其證拠アルニ非ス銘モ何人
ノ作ニヤ名モ記サス元符二年ハ東坡卒セシ
前年也四

或云世親は塘田彦古河城主の時業師を言信し
たひて猶ありといふや——ちよ記録ありと永徳院
へ東渡の画牒を譲られし後のもころし——予
の政長も此書をたゞも讀みんばちよ石色深黒
よく質緻密本邦田畠をあるづきの名産であら
うと似ありき

君力をあめさるる後へ手相のちよもちよにお
知れし人の手氣も此よりあれもやう——ちよ
川——ちよきし形貌多きなりたるよとて——
ちよ、付物相ありとて、おきつれと出れらるるひ
んりるよとて、ちよとて、ちよのちよとて

片

一 下野五植野主 田中幼解也 異例古傳記述并に

唐澤軍記を二校布陣攻められ佐佐木宗俊のちよ
ちよ田中幼解也の名し由又此を三箇信佐佐木
多信しちよ世名いづ同を七箇長お討めちよ
ちよを滅亡のちよも世名なき哉せたり——さて佐野記
校本を戦のちよも思案行つちよ——ちよ、植野、唐澤
植野母娘をちよか傍納るとありと鬼討ちを戦のちよも
ちよちよとて、ちよとて、ちよとて、植野とて、植野
書——ちよ外佐佐木記をちよちよとて、ちよとて、世
とて、植野田中とて、ちよとて、ちよとて、ちよとて

子出ひる水と地味傳をききし所ありといひ傳へたる
事ありあらむ所ありとてその地味なりとれとる哉
る村内は傳りてとるなり

此一巻は久政七年の事なりと傳書に及ぶ
ざる程同十年亥十月此出らうつ赤坂村と
公の所用地とありぬされを畧へきをいた
つらふとせんも中へこれとるべきとめある所
跡といふなり

古河志附録畢

XXV

2125

